

## 連載・雑草のよもやま 《第41回》

学業・業務・晩年の趣味、生涯を通して雑草にも関わった  
植物病理研究者の岩垂 悟氏

森田 弘彦

農研機構 北海道農業研究センターと北海道立総合研究機構 中央農業試験場などの前身である北海道農事試験場（図-1）が、1931（昭和6）年に彙報第51号として刊行した「北海道に於ける水田雑草（図-2-A）」は都道府県単位の雑草情報のごく初期の一つである。その25年前、同彙報の3、4合併号「大島金太郎 北海道物産共進会出品物解説書、1906」の末尾には種名と短い解説付きの「雑草 乾燥標本：50点、種子標本：35点」が載るもののその多くは畑雑草のため、水田雑草としては彙報51号が嚆矢で、下記の「緒言」がある。

「農業上雑草の害に就きては、何人もよく熟知するところにして、今茲に詳説するを要せざるべし。（中略）撲滅の方法としては、食鹽、石灰、石油、硫酸、硫酸銅、硫酸鐵等の藥品を用ふることなきに非ざるも、是等藥品の使用は極めて特殊の場合にのみ限られ、専ら機械的方法即ち手或は除草器を使用するを普通とす。（中略）其の最も必要とするところは、先づ初に雑草の名稱を明にし、其の性狀を知り、其の傳播分散の方法を詳にし、更に其の害の程度を探り、且其の種子の鑑別をなすことなりとす。（後略）」

執筆者は、北海道帝国大学農学部農業生物学科の1927年と1929年の卒業生で、当時「一、作物病害・二、雑草」の試験を担当した北農試の「第七部」の田中一郎氏と岩垂 悟

氏である。接合藻植物のホシガタミドロ科から双子葉植物のキク科まで53科178種を検索表と共に解説し、巻末に34点の腊葉標本写真（図-2-B）が付く。178種の中には現在の重要雑草種であるミズアオイを欠くが、両氏の調査範囲が上川、渡島地方で、石狩・空知を含まないためかもしれない。178種の内30種は「濱 浪夫 水田の灌漑と除草、1947」に引用された。

なお、1931年は冷害年で、11月には我孫子孝次場長の下記の前書きで、北農試彙報第52号「北海道に於ける食用野生植物（図-2-C）」が、同じく田中・岩垂氏の執筆で刊行された。

「・・・本年本道の氣候は、春季以來著しく不順にして、作物の作況不良なりしを以て、地方によりては収穫の激減、食糧の不足を慮り、夏秋の候、既に野生植物を採集し、之が利用を講ぜんとするものあるに至れるは、洵に憂慮に堪えざるところなりとす。此の時に當り、食用野生植物の種類を明にし、其の用途を知らしむると共に、他の混同し易き毒草との區別、並に含毒の部分をも分明ならしむるは緊要のなりと認め・・・（後略）」

上記2冊の彙報の著者のうち、田中氏の詳細は存じ上げないが、岩垂氏は筆者の北海道農業試験場（現 農研機構北海道農業研究センター）在勤中には同場近くに住んでおられ



図-1 旧北海道農事試験場の本館、「試験場内耕読会 北海道農事試験場（絵葉書）、戦前（1929-1935？）」より

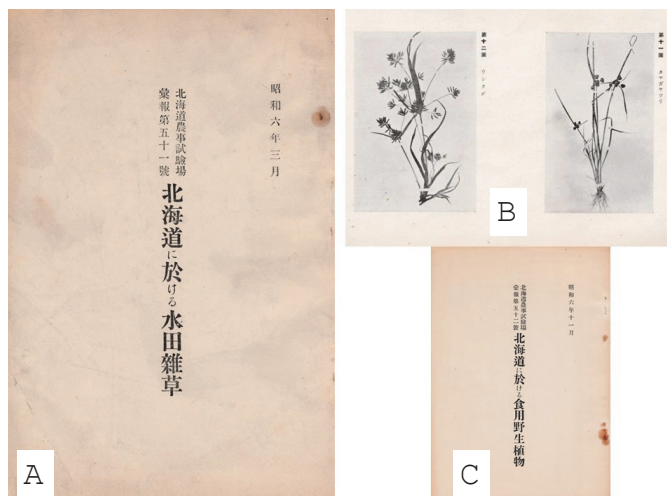


図-2 北海道で最初の水田雑草の文献情報、「田中一郎・岩垂 悟 北海道に於ける水田雑草、1931」の表紙（A）と巻末の標本写真（B：ウシクグとタマガヤツリ）および同一著者による「北海道に於ける食用野生植物、1931」の表紙（C）



図-3 岩垂 悟氏のガリ版による12冊の植物画文集、「草と木 スケッチブック、1983-1985」、「草木スケッチ、1986-1993」および「ガリバン版画 野の花、1994-1996」の表紙

たので、筆者の離道後も含めて北農試の先輩として植物情報に関してご交誼を頂いた。小柄ながら頑丈な体格、温厚な岩垂さんは、当時すでに悠々自適な生活を送られていて、ガリバン刷りの植物画文集を作成され、1983年から1996年までの12冊をご恵贈頂いた(図-3)。その動機は「草と木スケッチブック 1983」の「あとがき」に次のようにある。

『今年は六月はじめから八月上旬まで異常低温が続き、作柄はさっぱりであったが、雑草はさかにはびこった。取っても取っても生えてくるので、時に戦草を休止して、身の野草をスケッチして見ることにした。やってみると案外おもしろいし、描くためによく観察しなければならぬので、勉強にもなった。稚拙なスケッチを孔紙版にして「北海孔紙」に載せていただいたり、「さっぽろたより」の表紙絵にして、結構楽しんだ。さて、草は枯れ、雪も降って、スケッチは明春までおあずけとなったので、若干余分に刷っておいたのを一冊にまとめて、スケッチ一年生の記録とした。昭和五十八年十二月 岩垂 悟』

作成部数は不明ながら、ガリバン植物画には、植物の観察はもちろん、ご自分や人間社会とのかかわりなどの短文が添えられ、以下の例のように「雑草」にもしばしば言及された。

○ハコベ 草木スケッチ 1983(図-4-A): むかし、ハコベはセリ、ナズナと共に七草のメンバーであったが、今はそんな優雅なものではない。今年のように雨天、曇天がつづく、畑も庭も雑草だ



図-4 岩垂 悟氏の植物画文集から「雑草」の記述例  
A: 「時任・宮部先生の雑草の定義を紹介したハコベ、草と木スケッチブック、1983、B: 「学生時代の北大農場の雑草調査体験を紹介したエゾタチカタバミ、草木スケッチ、1988」

らけになる。その主役がハコベで、取っても、取っても生えて来る。雑草については有名な言葉が二つある。一つは時任博士の定義『許可なくして生えるを雑草という』で、対照的なのが宮部博士の『植物学者に雑草はない』である。共に古きよき時代の北大教授である。そこで許可なくして生えた奴を、よく観察して、スケッチすることにした。(後略)

○ツクシ 草木スケッチ 1984: (前略)さて、ツクシはスギナの胞子茎である。地下茎を深く横にのばして広がり、切断されても、節から芽を出して、平気で繁殖する。時代は変わっても畑の厄介な雑草であることに変わりはない。わが家で芝生を作ったとき、発生したスギナの退治に除草剤 MCP をさん布したら、葉緑素のないもやしのようなスギナが出て、間もなく全滅し、美しい芝生ができた。

○エゾタチカタバミ 草木スケッチ 1988(図-4-B): カタバミもタチカタバミも、どこにでもある雑草である。茎葉に酸味があるので酢草とも呼ばれ、また漿草とも書き、俳句の季語にもなっている。(中略)その昔、学生時代に、館脇操先生から「北大農場の雑草調査」を縮題に与えられ、夏場にせっせと採集して腊葉標本を作っておき、冬場に、先生の指導で、名前しらべの作業をした。その中にタチカタバミもあった。これは大変に良い勉強で、後のちまで役立つ。そんなわけで、タチカタバミに会うと、あの腊葉標本庫の匂いや、先生のことなどが浮ぶ。

時任一彦先生(1871-1957)と宮部金吾先生(1860-1951)の雑草の定義や、夏休みの農場の雑草採集など、学生時代を含めて様々な逸話が綴られた。雑草調査について、上記の「藁

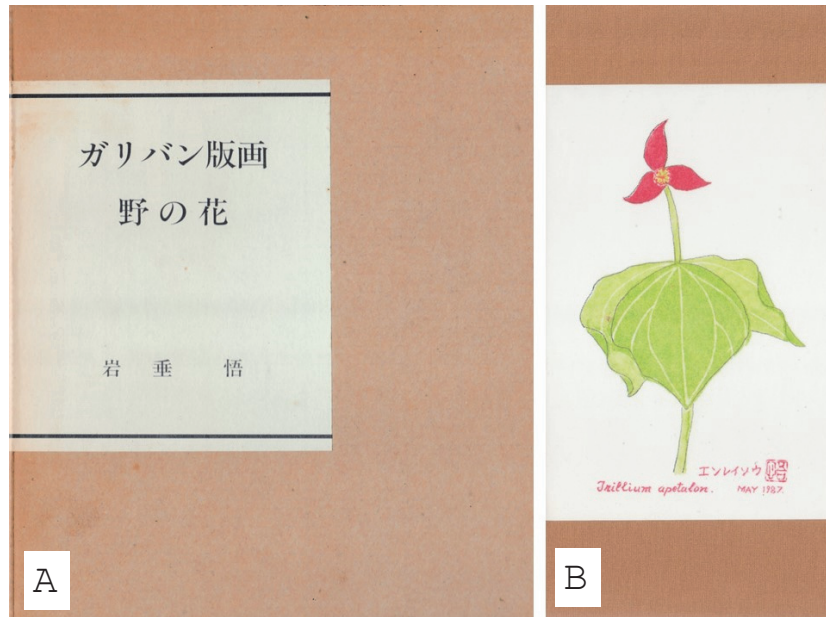


図-5 岩垂 悟氏の私家版「ガリバン版画 野の花, 1993」  
A: 箱, B: 表紙

報 51, 52 号」で標本の鑑定を指導された, 植物分類地理学の館脇 操先生 (1899-1976) は「・・1926 年の初夏より, 植物分科一年目学生, 永井 (政次), 岩垂 (悟), 石山 (哲爾), 荒木 (斯郎) の四君が農場に於て採集せられ, 且つ外部形態実験の資料に供し, 共々本年の冬期調査せしものを次にかゝぐべし。・・(北大農場の雑草について (第一報) 札幌農林学会報第 19 年 84, 1927)」と書き残している。

岩垂さんは「草木スケッチ」などをまとめて, 1993 年 6 月に岩波ブックサービスセンターから「ガリバン版画 野の花」を自費で出版された(図-5)。奥付には以下の略歴がある。

- 1904 長野県に生る。
- 1929 北海道大学農学部卒業, 北海道農事試験場。
- 1935 満鉄熊岳城農事試験場。
- 1938 同公主嶺農事試験場・満洲政府に移管。
- 1945 公主嶺にて終戦, 留用。
- 1947 引揚げ帰国。
- 1950 北興化学工業株式会社。
- 1966 札幌にて自由生活。

1950 年からの東京での勤務について, 学生時代の恩師, 植物病理学の栃内吉彦先生 (1893-1976) のご子息, 栃内香次北大名誉教授の回想に, 「・・岩垂さんは (中略) 戦後は 1950 (昭和 25) 年に設立された北興化学 (農業製造会社, のち北興化学工業と社名を改め現在に至る) に勤務されていた方である。同社は北海道に拠点工場を持つなど, 北海道と縁が深く, (中略) そのようなつながりで父とは昔からお付き合いがあり, 家にもしばしば来られていた。(後略) (北海道大学総合博物館ボランティアニュース 栃内吉彦先生小伝 抜粋特別号, 2018)」とある。帰札後の 1971 年には「農林植物病害雑草に関する北海道文献目録 1881-1969」を, また 1980-1982 年には, 恩師の随筆を新聞・雑誌記事から単行本まで収集して「栃内吉彦先生の随筆, 同続・続続」をガリバンでこれも自費出版された。その後, 80 歳の直前から 14 年以上にわたって植物画文集に取り組みされた。

筆者の不義理のせいで没年が不詳であるが, 学業・仕事・趣味を通して雑草と関わられたた植物病理研究者としての岩垂 悟さんを記録させて頂きたい。